# 佐藤家７姉弟の日常♪

霧宮　海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

佐藤家７姉弟の日常♪

【Ｎコード】

Ｎ８５４８Ｘ

【作者名】

霧宮　海

【あらすじ】

オレは佐藤空。一応佐藤家の長男だ。一応というのはオレの上に姉ちゃんが４人もいるから。それと弟、妹が一人ずつ。そんなにぎやかな佐藤家の日常の物語です！

※この物語に出てくる佐藤家はもちろん実在しません！フィクションです（笑）

# オレの日常

?.?.?.これは佐藤家のある7人姉弟の日常の物語?.?.?.

ジリリリリ、ジリリリリr「うっせーよっ!!」

バキッ

「…あ。」

ども。佐藤空(さとうそら)です。一応長男です。一応っていうのはオレの上に四人の姉ちゃんがいるから。そんで弟、妹が一人ずつ。7人姉弟だ。だからオレは下の方。

あー。眠ーー。日曜だからって調子のって寝すぎたか？でも寝たかったんだよ。

下の方から声が聞こえるってことはもうみんな起きてるってことか。オレらの家は二階建てで、二階にみんなそれぞれの部屋を持ってる。

今何時だろー。まーいーや。寝よ。二度寝二度寝。

ガチャ

「空ーー！朝！もう十時だよー。寝過ぎ！」

そう言い布団をひっぺがされる。寒っ。最近は朝が寒いんだよ。布団が恋しい。

起こしにきたのは長女の陽菜(ひな)だった。高三で十八歳。面倒見が良く

て、家事を大体担当してる。まあ母さん代わり？

母さんはいるけど今は病院にいる。ナントカカントカっていう病気だそうだ。何の病気か分からないって？オレも説明受けたけど忘れた。まあ…病院にいなくていいんじゃないかってくらいピンピンしてるけどな。

それともオレらが行った時だけそういうフリをしてるのか…よくわからない。

下でいろいろギャーギャー言ってるのであきらめて下へ向かう。リビングのドアを開ける。

うわ。騒がし。

「…はよ。」

「あ！空やっと起きてきたー。もうみんなとっくにご飯食べちゃってるよー？」

ソファに座り本を読んでた寿々（じゅじゅ）が顔を上げ、話かけてくる。彼女が次女で高２、１７歳だ。この姉弟の中でただ一人のメガネッ子。次女なのに七人の中で一番背が低い。これは言うと怖いから内緒でよろしく。

「いんだよ。残り物なんかない？」

「食パンがあるって陽菜が言ってたー」

そう言うとまた本に目を落とす。

本と読書好きだなー。俺も好きだけど時々二宮金次郎にならないか不安になる（笑）

トーストが焼けるのを待っていると二階からケンカのような話し声が聞こえてくる。

理恵（りえ）と真奈実（まなみ）だ。この二人は双子で共に高１、１６歳だ。この二人だけ同室で、まあよくケンカのようなジャレ合いをしている。ケンカするほど仲がいいてやつ？そのケンカを聞いてみると…

「ねえ理恵！今日だけあのバッグ貸してよ！今日友達と新宿行くの～～！」

「いやだよ！マナ（真奈実）に貸すと絶対ボロボロになる！」

女ってなんで鞄とか洋服一つであんなに言い合うんだか。前一回言った事があったが「空には関係ない！」とバッサリ斬られてしまった。今ってホント女の時代だよなー。

そんなこんなでオレも朝ご飯を食い終わり、ソファに座る。寿々は相変わらず本を読んでいる。

「寿々、ヒロは？」

ヒロとは尋子（ひろこ）の略。五女で１４歳。ここでようやくオレの妹になるわけだ。

「まだ寝てるー」

…おい。おれは起こしたのになんでヒロは起こさねんだよ。

ガチャ

「おはよ〜…」

噂をすれば影。ヒロの御起床だ。でもめずらしいな。ヒロはよく陽菜の手伝いをしていてあまり遅く起きてくる事はない。

あとは…孝浩(たかひろ)か…あいつは…もういいや。来ると疲れる。喉が渇いたので台所に行こうと立つ。

「そぉーーーーら!」

「ぐっ」

あーあ。来ちゃった。こいつが孝浩。中一で13歳。ホントに中一かよと思うほどガキだ。

プロレスごっこみたいなのが好きでしょっちゅう仕掛けてくる。今もいきなりヘッドロックを仕掛けられる。オレも別にプロレスみたいなのは嫌いじゃないし適当につきあっておく。

そして陽菜の怒りが降ってくるのだ。

こんなのが佐藤家の大体の日常。

## オレの日常（後書き）

こんにちは！霧宮海でーす！この作品は私の部メンがモデルとなっていて、リア友である菜ノ花さんと話して別々に作った物語です。モデルの人が一緒なので、誰と誰が同じモデルの人か当ててみてください♪

## 学校

「そーーーーーらーーーーーー！」

「ん？あ。ヒロ。何でいんの。」

月曜日。オレはいつものように家を出る。中学は家から約１０分だ。いつもはオレがまず一番始めに出、その後にヒロ、タカの順に家を出る。オレは家を出るのが早すぎてタカは遅すぎるのだ。だから三人はいつもバラバラに家を出ていた。

「うん。たまにはソラと一緒に行ってみよっかなーって。」

後ろから走ってきたヒロはオレの横まで来て肩で息をしながら笑う。

「ふーん」

ヒロは結構ボケというか天然だ。人工じゃなく自然の。それだけに時々言葉が痛かったりする。

それから他愛もない話をし、学校につく。

「それじゃ、放課後」
「ああ」

下駄箱で別れる。上履きに履き替え、自分の教室に向かう。3年は一番上だ。受験生なんだし労って1階にしてくれてもいいと思うのはきっとオレだけじゃない。

ガララ

教室のドアを開ける。そこにはいつも通りの教室。そしてオレの席は廊下側の一番後ろ。よく他のクラスの友達っていうか悪友?が窓を開けて話しかけてくる。

それまでの時間は読書。結構幸せな時間だ。

数分で崩れるが。

がらっ
「ソラ!はよ!今日も読書か?かっこつけてんなよ!」

「うっせーな、てめー！いきなり窓開けて人の耳で喋んな！」
窓を開けていきなり話しかけてきたのは河野真輝（こうのまき）だ。一番の悪友と言おうか。こんな名前だが男だ。周りからはよくマキちゃんと呼ばれている。それなりに顔もいいしモテる方だ。羨ましくないと言ったら嘘になる。

「まあまあそう言うなよ。オレのおかげでお前絶対耳良くなってっから！」
「そんなことで耳良くなってもうれしかねーよ」

苦笑いで返す。オレらの話しはいつもこんな感じだ。でも二人とも声がデカすぎてしょっちゅう周りから笑いがあがる。

「ちょっとお二人！声こっちまで聞こえてんだけどー！！」
その声に負けじと声を張るのは柴崎美咲（しばさきみさき）だ。

「本当に何であんなに声が出るんだろうね」
そう言って美咲と一緒に笑っているのが関百合香（せきゆりか）だ。ふたりはオレと真輝と一緒によくつるんでいる。

「仕方ねーだろ、ソラがソフト部なんだからよ！」
「はあ！？マキだって声めっちゃでかいじゃねーか！それにな、ソフト部の声量舐めんなよ」

マキの方へ指を向けて言う。ソフト部に所属しているオレは今最高学年という事になるが威厳なしである。

そして読書に戻る。

マキｓｉｄｅ

ソラが読書に戻る。正直このすました顔が気に食わない。本気じゃないけど。

！そーだ。

そーーーっとソラに気づかれないように近寄る。

シュッ

「おりゃっ！」

ソラのネクタイを奪い取る。

「あ！おい！」

ソラが胸元に手をやり、取られた事に気づく。急いで逃げるオレ。

急がないと結構すぐ来るんだもんなー。

思った通り本を机にバンッと置いてすぐ立ち上がり追いかけてくる。

まあこんなことがオレらの日常。

## 学校（後書き）

あーー…久々の投稿…

久々どころじゃないっすよね…

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8548x/

---

佐藤家７姉弟の日常♪

2012年1月4日13時45分発行